

「FLOWER IN TOKYO」

脚本・監督 彭衆海

スタッフ..

プロデューサー： PENG ZHONGHAI

撮影： PENG ZHONGHAI

美術・制作： PENG ZHONGHAI

照明： LAN XINYU

アシスタント： LAN XINYU

記録： SHI HAORYU

録音： LI FENGYU

メイク・制作： XU XUEJUN

韓：男性、大学3年生、将来についてまだ考えを持っていない、比較的
散漫 なる。

陳：女性、大学4年生、韓の彼女。

あらすじ

橋で待っている女性（陳）と花束を持ってきた男性（韓）は遅刻し、韓はタクシーで予定していた場所に行こうとするが、陳はどうしても歩いて行きたい。

陳が韓が遅刻ばかりしているのが気に入らない、無駄遣いをしてるのが気に入らないなど、ちょっとした感情のぶつかり合いがあって、それから歩いて話をして、冷え切った関係や距離感が少しずつ暖かくなって、やがて二人が少しずつ理解し、少しずつ変化して、最後に森に花を植えていくのである

駅近くの橋の上で長い間待っていた陳。

韓「わりいわりい、遅くなって」

と、急に話しかけられた。

花を入れた鞆を背負って、ゆっくりのんびりとした韓。

韓「はい、あげる」

背中から花束を取り出し、陳にかざした。

陳は固まった。

少し困惑で、哀しいな顔をして、ただ立っている。

韓「どうした？」

陳「うん」

韓「じゃ、行くっ？」

ちよっと気まずかしくなって、シャツで手を拭きながら、駅の方へ歩いていった。

陳「どこに行くの」

ようやく口を開いた陳。

韓「えっ？タクシーで行くんじゃないの？」

陳「歩いて行くの」

と言いながら、少し怒ったようで、先に歩き始めた。

韓「そっか、、、」

一瞬固まって、気まづくした韓。

一人で残されないように、追いかける。

無言の中で、距離を保つ二人。

遠くを歩く韓と陳の背中。

(左が韓、右が陳)

韓は時々陳の近くを歩こうとするが、

陳はすぐに離れてしまう。(右へ)

韓はなすすべもなく自分の進むべき道(左)に戻り、

陳も左に傾きながらも距離を置く。

距離を保つ二人。

韓「そんなに怒らないで」

陳「別に、怒ってないし」

韓「じゃなんで離れてんの？」

陳「つい」

と、二人の距離が少し縮む。

沈黙。

韓「ところで、どこに向かっているの」

陳「みずうみの方」

歩きながら無言になる。

韓「やっぱり怒ってる」

韓「遅刻したから？」

陳「違う」

韓「どっち？」

陳「怒ってないんって」

沈黙。

陳は少し離れていく。

韓「最近ずっと会ってないから？」

沈黙。

韓「タクシーで行くのがそんなに嫌？」

またの無言。

長い間の沈黙、そして、

陳「それらと関係ない」

悲しいのか怒っているのかわからない陳の顔。

それを見て、黙る韓。

話が途切れ。

無言が続く。

緑の階段道に入ると、陳はスピードをあげて前進し、韓は陳の後ろをゆっくりとついていた。

階段で歩く続き、少し疲れた陳はスピードが落ち、止まる。

韓はついに行こうと思ったが、気まづくして近寄れず、結局距離を保ちながら歩くしかできなかった。

繰り返すの気まづく距離感と、長い沈黙。

陳「就職先、決まった」

急に、陳は言いながら歩き始める。

韓「急だね」

韓は一瞬立ち止まったが、すぐに同じように歩き始めた。

韓「おめでとっ」

韓「どこの？」

陳「北海道の方」

韓に見えてないにもかかわらず、陳は目を下にそらす。

韓「えー」

韓「えっじゃ、行くの？」

陳「うん」

と言いながら、どんどん速くする陳と遅くなって韓。

大差で引き離れた二人は、それぞれマイペースで進んでいく。

川はとっくに見えなくなり、木々の隙間からうつすらと湖が見える。

陳の素早い動きと韓の思惑で、二人の距離がどんどん広がっていった。

と、陳が急に止まった。

追いつく韓。

距離を保つながら、陳の後ろに止まっていった。

しばらくの沈黙。

陳「最近はどうっ？」

陳は立っているまま。

韓「どっつてっ？」

と、言いながら陳を抜き、歩く始めた。

韓「何も、まだ2年生だし」

韓「就職か進学か、または国に戻るか、何も考えてない」

陳「そう」

と言いつつ、歩き始め。

陳「別れるんだね」

韓は一瞬止まる。

韓「いつ行くの」

別れるの話題を飛ばす

陳「あと2、3ヶ月かなあ」

陳「部屋を探さないと」

陳「あと色々」

韓「うん」

長い沈黙の中で歩き続く。

陳「行ってほしいの？」

と、陳は立ち止まった。

鳥居の下まで歩いた韓も止まった。

しばらく立ち止まって、

韓「行かせたくないと言ったら」

振り返す。

韓「どっするっ？」

陳は、頭を下げた。

陳をまっすぐ見ている韓。

言葉なき長い対峙。

陳「どっするっ？」

陳「わかるんだろっ」

陳無意識に花を強く握りしめてしまう。

韓「うん」

陳「就職のため、これまで頑張ったことも見ただろっ」

韓「うん」

陳「あと2年あるし」

韓「うん」

陳「国に帰るかもしれないし」

韓「うん」

―――話が止まる。

陳「うんって」

韓「大変だっただろう」

韓「しばらく会ってないんだから」

韓「知ってる」

韓「迷惑をかけるのが怖い」

韓「自分の将来のためにも行ってほしい」

韓「ただ」

―――瞬で目をそらし、戻る。

韓「ただ、この間ずっと」

韓「君に会いたかったんだ」

陳もまっすぐ見る韓。

陳「知ってる」

陳は沈黙に陥った。

韓「だから」

韓「行かせたくはない」

韓「わがママを言っのが知ってる」

韓「まだ」

韓「別れたくない」

韓「それだけだ」

再び、沈黙に陥った。

陳「無理」

と言いつつ始め、目をそらす陳。

陳「遠距離なんて」

少し止まる。

陳「社会人になって、休みもそんなになくて」

陳「毎回会うのは時間も金もかかるし」

言いつつ頭を下げつつ陳が沈黙に陥った。

陳「それに、」

急に、陳が顔をあげ、韓の目を見ながら話すが、

韓「そんなの関係ない」

と、遮られる。

陳の真っ直ぐ見る韓。

韓「会いたくなったら」

韓「会いに行く」

陳はしばらく間を止まっていた。

陳「そんな簡単だ」

信じてないのような陳の顔。

韓「月に一回、北海道に行く」

陳「学校はどうする？」

韓「休みの日に行く」

陳「卒業したら？」

韓「日本に残る」

韓「就職する」

韓「僕も北海道に行く」

陳「やめなよ、私のため」

韓「僕が行きたいから」

陳をまっすぐ見る韓と、目をそらす陳。

沈黙が続き。

突然と、決まったようで、陳は急にすぐ韓の手を繋がり、階段を登り始めた。

花束を強く握る陳の手。

陳の手を強く握る韓。

無言で階段を登った。

神社で参拝した二人。

そして、階段をの登った二人は疲れたようで、

手をつないで神社の椅子を座っている。

陳「私にくれた花の花言葉、知ってる？」

と、陳は話をかけた。

韓「ううん、知らない」

陳「わかれ」

韓「えっ？」

驚いた韓。

陳「花言葉」

韓「あっ」

韓「ただ綺麗なあとと思って」

韓「買ったので」

韓「だからそんなに怒ったのか？」

韓「ごめん」

陳「うん」

陳「この花をくれたのは」

陳「別れようとしてるんじゃないかと思ったんだ」

韓「思っていない」

韓「そのつもりはない」

陳「知ってる」

陳「ただ、どうしたらいいのか、混乱しているんだけ」

韓「うん」

韓「ごめん」

黙って考える二人。

突然と、

韓は陳の手から花を受け取ると、そのまま脇の木まで歩いていく。

陳「どうしたの？」

と言いながら、陳はゆっくりと後をついてた。

木の下、

韓は地面の柔らかい土に手を入れ、花を植え込んだ。

韓「これで、わけないんだね」

陳「うん」

そして、再び土を埋め戻した。

韓は手のひらの汚れを叩いて立ち上がった。

韓「来年も、ここに来ようね」。

陳「うん」

韓「じゃ、帰ろうか」

陳「うん」

階段を降りた二人。

木漏れ日が、この一本しかない花だけを照らしている。

暗幕。

グリーンエンドに再び戻ってきた奥多摩。

木の下の花は、もつとつくに途絶えている。

韓は一人、神社にひっそりと佇んでいる。

暗幕。